平成28年度
最優秀・優秀作品

テーマ　「わがまちの誇（ほこ）り」

※平成28年度より部門を「一般の部」「小・中・高等学校・大学の部」から「小学校の部」「中学校・高等学校の部」「大学等・一般の部」の３部門に変更しました。エッセーのテーマは共通です。

【小学校の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

「杵築市の自まんカブトガニ」

杵築市立杵築小学校４年　**松　藤　龍　哉**

ぼくの住んでいる杵築市の自まんと言えばすぐに思いつくのが、カブトガニです。

カブトガニは、ぼくの家からも見える杵築市の守江わんに生息しています。カブトガニは、「生きた化石」とよばれ、何億年も前からほとんどすがたが変わっていません。杵築市のいろいろなところで、マークとして使われたり、杵築市の校長先生が考案したカブトガニの折り紙は、杵築市におとずれた観光客の人たちに配られたりしています。この折り紙を大分県体の時に、杵築市の選手団が持って入場行進したこともあったそうです。

そんな自まんであるカブトガニは、今では大分県の杵築市と中津市、そして岡山県や山口県福岡県の一部にしか生息しておらず、かんきょう省のレッドリストに、ぜつめつきぐ種として、のせられています。

杵築市の自まんであるカブトガニが、どうして、ぜつめつのききにあるのか、おうちの人に聞いたり、インターネットを使って調べたりしてみました。

今から、四十年ほど前までは、杵築の海にもカブトガニがたくさんいたそうです。そのために、漁をすると、カブトガニがあみにたくさん引っかかってしまうので、大事なあみを守るために、カブトガニの足を切って、田畑のひりょうにしたり、すてたり、食べたりしていたそうです。母が小学生のころ、港に写生に行ったとき、足を切られたカブトガニが山積みにされているのを見たことが、今もわすれられないと話をしてくれました。

他にも、きたない下水が海に流れこんだりゴミをすてて海がよごれたりしたことも、カブトガニが少なくなった原いんです。一年生のころに、『ウミガメのなみだ』で、ウミガメたちが、クラゲとまちがえてビニールぶくろを食べて死んでしまったお話の勉強を、カブトガニのことを調べていて、思い出しました。カブトガニが住む場所を、人間がきたなくしてしまったのだと思います。

杵築市の自まんであるカブトガニを守っていくために、自分にできることを考えてみました。ゴミは、必ずどこに行っても、ゴミばこにすてるか、持って帰りたいと思います。他にも、水をよごさないために、ちゃわんをあらうときは、せんざいをたくさん使わないように気をつけたいと思います。

杵築市でも、りょうしさんたちが、海を守るために、月に一度は海のそうじをしたり、海を豊かにするために、山に木を植える活動をしたりしているそうです。ほかにも、カブトガニを守る会の人たちが、カブトガニのさんらんをする場所をそうじして、みんなでカブトガニを守ろうと取り組んでいます。

みんなの力を合わせて、いつまでも、カブトガニが杵築市の自まんだと言える町にしていけるように、ぼくもがんばっていこうと思います。

【小学校の部】
優 秀 賞

「歴史を感じて」

杵築市立大内小学校４年　**阿　部　雷　蔵**

今年、ぼくは四年生になった。歴史にきょうみが出てきて、公民館で開かれる「杵築市こども歴史探険たい」に入った。杵築市は小さな城下町で、古くからのものがたくさんある。それがぼくのちょっとした自まんだ。その中から三つしょうかいしてみようと思う。

まずは、お祭り。杵築市には、春のお城祭り、夏の天神祭り、秋のどぶろく祭りとあって、たくさんのお客さんが市外からも来てくれている。暑くなってきた今の季節、ぼくが楽しみにしているのが天神祭りだ。このお祭りは、毎年夏休みに入ってすぐの７月24、25日に行われる。ぼくは毎年、両親と弟の家族四人で出かける。けいだいや通りには出店がたくさんならんでいて、人通りも多く、こんざつしていて歩きづらいくらいだ。ぼくも弟もくじびきをするのが大好きで、何が当たるかどきどきする感じがたまらない。金色にかがやくおみこしやおはやしの音楽といっしょに近づいて来る大きな山車が城下町の商店がいに出て来て、ごうかで迫力がある。外国の人が侍のかっこうをしているのもよく見かける。ぼくもおみこしをかついだり侍のかっこうをして城下町を歩き回ったりしてみたいなと思う。

このわくわくするお祭りを始めてくれた昔の人たちのことを想ぞうして、「きっと今のお祭りを天国から見ていて、いっしょに楽しんでくれているのだろうな。」と考える。このお祭りのおかげで、ぼくの夏休みはもり上がるので、昔の人には感しゃしている。だからぼくがおじいさんになっても、古くから伝わる天神祭りがずっと続いていてほしいと願っている。

次にしょうかいしたいのは、日本一小さいお城といわれている「杵築城」。
いろんな人から、
「杵築城は日本一小さいお城だよ。」
と言われていて、ちょっといやだな、はずかしいという気持ちになっていた。でも、三年生の時に見学に行って係の人の説明を聞いてからは杵築城が大好きになった。それは、杵築城が海に面しているため、敵はなかなかお城の中に入れず、ほとんどの戦いに勝っていたという話だった。そんなふうに戦いに勝っていったから今でもお城や城下町が残っているのかもしれないと考えるようになった。今はこの日本一小さい杵築城をほこらしく思う。

最後にしょうかいするのは、人間がつくった古いものではないが、他の地いきにはあまりいないカブトガニだ。生きた化石とも言われているカブトガニは一回のだっ皮でもとの体の大きさの1.3倍になるらしい。ビデオでだっ皮のしゅん間を見たときは、思わず３・４年生全員がはく手してしまうくらい一生けん命な様子で感動的だった。

ゆたかな自然と歴史がある杵築市に住んでいて本当によかったなと思う。

【小学校の部】
優 秀 賞

「わがまちの誇り」

杵築市立豊洋小学校５年　手　島　悠　斗

ぼくの住んでいる豊洋地区は自然豊かで緑がたくさんあるところが自慢だと思っています。

ぼくの家はとても緑に囲まれていて、学校に歩いて登校する時も、緑は必ず目につきます。一年を通して、葉の色がだんだん変わっていく、四季の変化もわかります。また、もう卒業した友達の家の庭はさらに緑がたくさんあって、野球などをしてよく遊んでいました。とても広い庭だったので、思いっきり打ったり、走ったりできました。

豊洋は、景色もとてもきれいです。日がしずむとき、山にしずんでいく景色が特にぼくは好きです。そして、たまに父さんと妹、弟と家の近くの散歩にも行きます。田植えした稲の穂がだんだん成長して黄金色になった時が、ぼくは一番好きです。また、春になると家の近くの桜の花が咲き、家族みんなで外をながめながら、

「きれいだな。」

「うん。そうだね。」

と話したりしながら桜を見ているのは楽しかったし、とても心に残っています。

また、豊洋には「見立山」という山があります。夜になると見立山の頂上に建っている鉄とうが赤く光ります。まるで見立山が生きているように感じます。この夜の景色もぼくは好きです。

ぼくはこれからも自然を大切にしていきたいと思いました。昔小さいころのぼくは、「大分市などのようにたくさんの建物が、ここにあればいいのに」と思っていたけれど、今は緑がたくさんあるこの環境がとてもいいなと思うようになりました。だから、いつまでも緑をなくさないでほしいと思っています。なぜなら、緑は人の心をいやすと思うからです。だから緑をなくしてほしくありません。そしてまた、木々がなくなったら、ぼくはさびしくなると思います。建物がたくさんある大分もいいけれどその中に、たくさん緑もあったほうがいいと思います。だからぼくは自然いっぱいの緑が豊洋のほこりだと思います。

また、毎月全校で取り組んでいるクリーンクリーン作戦という清そう活動や海開きの前にしている浜そうじ、松の植樹など、自然を守る活動をこれからも続けて、がんばりたいと思います。

【中学校・高等学校の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

「わたしのまちから全国に」

大分県立鶴崎高等学校２年　**森　﨑　　澪**

浜辺の足音はサクサクと気持ちが良い。ガラスよりも透きとおるきれいな水が小さな波を立て、キラキラと太陽を照り返している。こんな光景が見られるなんて、八年前の自分には思いもしなかっただろう。

私が生まれ育った大分市の八幡地区は、海や山、川の全てを味わうことができる自然豊かな場所です。また、これらに加え温泉も味わうことができます。

このまちの誇れる所はこれだけではありません。その自然をきれいに保とうと地域の人々が活発に活動し、自然と人との共存が成り立っているのです。

私が小学生の頃、このまちにはある問題がありました。それは環境についてでした。小学校の横をながれ、海まで続いている川は、いつも茶色く濁り、川のまわりの家から出る洗濯物の洗剤や汚れが川に捨てられ、変色したり泡が立ったりしていました。また、山は高崎山とつながっているため、猿が来て、山を荒らしていき、とても困りましたし、何より遠くから来て、犬や猫、家具などを捨てていく人が多かったため、捨て犬や捨て猫が増え続けてしまっていたのです。そして近くに海水浴場がある海では、人通りが多いため、ゴミがたくさん捨てられ、砂浜をサンダルなしで歩くのはとても危険でした。

これらの環境問題を改善しようと立ち上がったのは地域の人々でした。まず取りかかったのは山のゴミに関してです。ゴミは、よく草が茂っている人が立ち入らないような所に多く捨てられていたため、道などをきれいにしたり、空き地の草を刈ったりして、ゴミを捨てられない環境作りをしました。そして、立ち入り禁止区域には柵を作ったりして不法侵入等も防げるようにしました。そして次に取りかかったのが海です。海は別大マラソンの参加者とゲストで行うゴミ拾いなどを中心に、年に何回も「裸足で歩けるビーチ」をキャッチコピーとして取り組み、今では本当に裸足で走れるほどきれいな砂浜になっています。そして最後に、一番の問題であった川に取りかかりました。川のクリーン活動には地域の小学生も参加しました。当時小学生だった私ももちろん参加しました。小学生である私たちは、竹炭作りをしました。竹炭は文字どおり竹を切って焼き、炭にしたものです。竹炭には消臭効果や水をきれいにする働きがあり、竹炭を作って川に入れ、透き通ったきれいな川を目指し、活動しました。地域の人々と小学生の協力があって、現在は川の水がとても透き通り、魚やカメ、鳥、ホタルも増えました。川がきれいになると海の水もきれいになって、このまちの山、川、海はどれもきれいで、その上住みやすいまちになりました。そして何よりすごいのは、一度きれいにした自然が今でもきれいなままであるということです。

私はこのまちを本当に自慢に思っています。自分たちの住んでいるところの自然環境が悪くなっていることに、いち早く気がつき、改善にとりかかる。これはいつも周りの環境をよく気にかけていて、変化に気づけるような人でないと無理です。それに、改善に取りかかるとき、強制参加させたわけではないのに自然と人が集まる姿に、地域の方々のこのまちを愛する心が、環境をきれいにしたのだと感じました。

私は、このような経験を通して、この地域改善の輪は全国に広げられるのではないかと思いました。各地域の問題点をそれぞれの地域で見つけ、それを改善させていくことによって、大分市全体に良い環境を広げる。

そして、各市の誇れるものをもっともっとPRしていけば、今度は大分県が豊かなものとなり、自分のまちから大分県を変えることも、夢ではありません。そして、その連鎖を県から県へと広げていくことによって、全国に良い連鎖をもたらすことができます。私たちが、日本全国をも変える力を持っていることを、このまちが教えてくれたのです。

【中学校・高等学校の部】
優 秀 賞

「ふるさとの力とこれからの大分」

大分県立鶴崎高等学校２年　太　田　美　緒

人にはそれぞれ生まれながらの故郷がある。私は今、自分の故郷である鶴崎に育てられたことを実感している。鶴崎で行なわれる祭りでの体験が今の私をつくってくれたのだ。

鶴崎では、毎年夏に二つの祭りが行なわれる。「二十三夜祭」と「鶴崎踊り」である。この二つの祭りは昔から伝統的に行われており、近年では地域の人だけでなく外国からもたくさんの人が集う大きな祭りとなっている。花火や出店などがあってとても楽しく、同時に私はこの二つの祭りを誇りに思っている。それも、あるエピソードがあったからだ。

それは、私が中学二年の頃、二十三夜祭を満喫していた時だった。私はかき氷を美味しく食べていたのだが、周りを見てみると何やら黄色いチョッキを着たおじいさん達が、道路に落ちていたゴミを拾っていた。その時の私は未熟なことに、それを見るまで道路にゴミが落ちていたことに気付かなかった。その後私は鞄につけていたキーホルダーをどこかに落としてしまった。しかし、諦めて出店を回っていると、五歳位の小さい子供が自分に届けに来てくれた。落としたのは随分前だったので、きっと落とした時からずっと追いかけてくれたのだろう。そのこともあったが、何より拾ってくれたこと自体がとても嬉しかった。鶴崎にはこんなにも優しい子供がいるのかと感心し、誇りに思った。

また、中学三年の頃は、自分は鶴崎踊りに踊り子としての参加はしなかったが、友達が踊り子として参加するということで、練習について行った。しかし、行ったはよいものの、知らない人ばかりで、友達はずっと練習をしていて、私はただ一人で見ていることしか出来なかった。そこに一人のおばあさんが来てくれて、参加をしない私にも優しく踊りを教えてくれた。そして私は地域の人の優しさ、温かさを知ったのだ。

これらの経験を通して私は高校生となり、大きく成長することが出来た。それも、地域の人のおかげであり、そんな温かい人がたくさんいる故郷のおかげである。鶴崎は、私を成長させてくれた誇り高い町なのだ。

鶴崎だけでなく大分には、様々な地域で小規模なものから大規模なものまでたくさんの祭りがあり、どの祭りも多くの地域の人に長く愛され続けている。しかし人間というもの、どうしても祭りに来ると興奮して周りが見えにくくなってしまうものである。そして祭りの後には、ゴミが目につく。だが、祭りに来ている人は少なくとも地域を愛していると思うので、地域がゴミだらけになるのは嫌なはずである。大分には心優しく地域のことが大好きな人がたくさんいるが、自治会の人だけでなく、地域の皆がもっとすすんで祭りに参加し、周りに気を配るようになれば、さらに町はきれいになって祭りに参加する人も増え、今以上に誇りを持てる町になるとも思う。

そして私達は、未来の子供達が温かく成長するためにも、祭りを絶やさず、この誇り高き故郷の伝統を受け継ぎながら、町を活性化させていく必要がある。そのためには、否が応でも行政と関わっていかなければならないだろう。高校生である私達に出来ることは限られており、大人のように選挙に出馬して自治活動や祭りを盛んにするきまりを作ることは出来ないが、もうすぐ十八歳になる私達には、選挙権ができ投票に参加することが出来る。選挙のことはまだよく分からないから誰でもいいと投票する訳にはいかない。これからの大分をよりよくしていくためには、自分の一票を大切にして、しっかりと考え、ふるさと大分の伝統を活かすことのできる人を見極め、投票するという義務が、大分県民である私達には、課せられていると思う。

このように大分をよりよくするために私達が出来ることは色々とある。幼い頃の私のように、鶴崎の人々や、伝統的な行事によって成長していく子供が増えてほしい。私は、この祭りでの体験をきっと子供たちに伝えるだろう。

【中学校・高等学校の部】
優 秀 賞

「大分の風に思いを託して」

大分市立滝尾中学校３年　川　村　　萌

四年前の夏。私は初めての引っ越しを経験した。それも、住み慣れた大分から未知の北海道までの大移動だった。私はあの時、住まいだけでなく、他にも多くのことが変わってしまったように思った。幼い頃から続けていた習い事をいくつかやめた。以前はすぐに会いに行くことができた祖母と、電話でしか話せなくなった。知り合いのいない北国で、家族五人、言いようのない寂しさを抱えていた。

しかし月日を重ねていくうちに、新しい生活にも慣れ、寂しさは薄れていった。あんなに珍しかった雪にも、親しみさえわくようになった。それでも私達は、以前とは違う寂しさを感じていた。自分が北海道弁を口にするたびに、そしてテレビで雪がない九州の冬を目にするたびに、大分が遠のいていく気がした。小さかった一番下の弟にいたっては、大分のことなど忘れ、すっかり北海道を満喫しているようだった。

何しろ北海道には、美しい自然やおいしい食べ物がたくさんあった。本当にすてきなところだった。

しかし私達はずっと、心の中で願っていた。

「大分にもう一度帰りたい。」三年たっても、大分への思いは薄れなかった。むしろ強くなっていた。そしてついにその年の夏、大分への転勤が決まったのだ。

飛行機から大分に降り立った瞬間の、あの感動は言葉にできない。引っ越すまでは好きではなかったあの蒸し暑い、なまあたたかい風が、私の体を包んだ時、一気に嬉しさがこみ上げてきた。三年間の空白など気にならず、北海道を懐かしむ余裕すら生まれた。

ところが、久々の故郷は予想外の連続だった。転入した中学校は、それまで通っていた中学校とは比べものにならないほどのマンモス校だった。幼なじみだった同級生も、以前とは雰囲気が変わっていた。そのうえ、まちの様子も大きく変わり、ひどく都会に見えた。なんだか、浦島太郎にでもなったような気分だった。

それでもやはり、故郷であることに変わりはなく、北海道で感じた寂しさを味わうことはなかった。それどころか、引っ越しを経験したことで、以前よりも増して、大分のよさが身にしみるようになった。それは私が変化したからなのか、それとも大分が変化したからなのか。ひょっとしたらその両方かもしれない。庭で育てたかぼすのみずみずしさ。祖母の家の近くの、きらきらと輝く大分川の水面。田ノ浦の静かな波音と、爽やかな潮風。別府の湯けむりと、かすかな温泉の匂い。そこには思い出がある。そしてささやかな幸せがある。そのことに私が心を動かされるのは、引っ越しがあったからだと思う。あの時感じた寂しさも、あの時見つけた北海道のすばらしさも、私の大切な糧になっている。

私も、大分も、日々変化し続けているという事実。引っ越しの時は変化を感じるのが寂しかったが、今の私にははっきりと言える。「変化」は「成長」なのだ、と。

一つの変化が、変化の連鎖を生む。その先に成長がある。私が変化し、成長していくのと同じように、大分にも新しい名所ができ、多くの人が集まって、変化し、成長していく。でも、大分が私の大好きな故郷であるということは永遠に変わらない。

これからも、大分が多くの人に愛されるまちであり続けるために、日々の思い出の中にある大分を胸に焼きつけながらも、新しい大分のよさを探していくことが大切なのではないだろうか。ただいたずらにまちを変えても、幸せは生まれない。人々に寄り添って変化していくまち、そんな温もりのある大分を失ってはいけない。

まちと人々が互いに寄り添うまち、大分。訪れる人々に思い出を、そして幸せな気持ちを。住む人のあたたかさで、大分を包み、訪れた人々を包みこむこと。それが、私たちに思い出と安らぎを与えてくれる大分への、ささやかな恩返しである。

【大学等・一般の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）

「ご先祖様とつくるふるさと」

玖珠町　手　嶋　郁　子

私のふるさとは大分県西部、日田市大肥町です。福岡県朝倉郡東峰村と隣接しています。その小さなふるさとには、地域活動として長く続けられているお墓掃除があります。数年前母に尋ねた時、嫁いできた時にはすでにお墓掃除はしていたと話していましたので、六十年以上は歴史のある活動だと思います。お世話は地域の婦人会長さん。毎月一回、日曜日朝八時から十時頃まで、その日が都合が悪ければ、前日の土曜日に実施していたと教えてくれたことを覚えています。

私が子どもの頃、母や祖母が用事がありお墓掃除に参加できない時、姉と箒や草取り用の小さな鎌を持って参加していました。今ではすでに亡くなっている近所のおばちゃんたちが働き盛りで活動の中心だった頃です。小さかった私たち三姉妹は、おばちゃんたちに混じり、おしゃべりしながら草取りしたり、枯れ葉を掃いたりしました。草は根元をしっかり握り根から抜くこと、掃く時は枯れ葉を上手にかき集めて土は取りすぎないこと、お墓のそばの小さな橋を渡る時は下の段にもお墓があるので「渡らせてもらいます」と仏様にお断りしながら通ること等教えてもらいました。お盆前の掃除では、汗だくで頑張ると木陰でひと休み、みんなでアイスキャンデーを食べました。

「お墓掃除をするとご先祖様が喜んでくれるよ。」「ご先祖様が守ってくれるよ。」「お利口さんになるよ。」とおばちゃんたちの元気な声や大きな笑い声が今でも聞こえてきそうです。温かくて嬉しくて懐かしい今は亡きおばちゃんたちとの思い出です。

七月下旬、姉と里帰りして今年もふたりでお墓掃除をしました。久しぶりに山にのぼってみましたが、今年もお墓の周りは草もなく花立も湯呑みも綺麗にしてもらっていました。つい当たり前のように見ているこの景色もご近所のみなさんの活動のおかげだと思うと、胸が熱くなり汗と涙でグチャグチャになりました。一緒に掃除している姉にも涙が伝染してしまうと思い、そっとぬぐいながら掃除しましたが、日頃のみなさんのおかげで一時間ほどで仕上げることができました。それから半月後のお盆前にも一度お墓掃除をして頂いていました。今では地域の人数も減り大変なようですが、農繁期を除く月、特に春秋のお彼岸前やお盆前に集中して力を入れて掃除しているということでした。

私は還暦を目前にしています。里は今両親がグループホームのお世話になっているので空き家状態ですが、ご近所の方々の温かい見守りの中で離れて暮らす私たち姉妹も安心して生活することができています。この歳になりふるさとを思うとき、ご先祖様たちが活動を通して人々のつながりを強くしてくれていると思うようになりました。活動の中心だった母世代は八十、九十を優に越え、地域もすでに「限界集落」となっています。当時たくさんいた子どもたちも今では数えるほどもないくらい減っています。今後の課題はたくさんありますが、そういう中でも地域活動のお墓掃除は脈々と受け継がれています。豊かな生活と引き換えに人と人とのつながりは薄れていると言われる今ですが、私の小さなふるさと、わずか二十五世帯の地域にはご先祖様と人々をつなぐお墓掃除があります。ご近所同士、力を合わせて交流する中で助け合う心、先祖と向き合い敬う心、そして、日々の忙しさの中で時間をつくり掃除しながら何より自分を磨く尊い活動だと思うようになりました。

わがまちの誇りは、私のふるさとに受け継がれているお墓掃除です。ふるさとのみなさんに私の溢れるほどの感謝と敬意を表しながら自慢したいと思います。

【大学等・一般の部】

優 秀 賞

「由布には菜の花が」

大分市　朝　日　容　子

朝のウォーキング中、私の住む大分市の高台から、由布岳が一望できる場所がある。

二月初旬、雪を頂く由布岳の美しさに友と二人、足を止めて眺めていると高齢の男性が話し掛けて来た。

「あん山が由布で、そん隣が鶴見、手前が高崎山、そん間に見える山は何か知っちょるな」と遠くの山々を指さした。

私達は顔を見合わせ、即答できずにいると、

「ありゃ、伽藍(がらん)岳や」と誇らしげに言った。

「あん中でも、わしは由布が好きじゃ。長く生きちょんと色々ある。くよくよしても仕方ねえから由布に向こうて手を合わせるんじゃ。そうしたら悩み事が消えちしまうんじゃ」寒さで頬を赤くしたご老人は、そう話し終わると、生き生きとした顔で歩を進めた。

丁度その頃、私の参加する読書会の先生が体調を崩された。以来、私はこの場に来て先生のご無事を祈ることにした。米寿を迎えた先生は豊かな感性と記憶力で読書に親しみ、敬愛された。二月の読書会では会員からのバレンタインチョコに人懐こい笑顔が弾けた。

一ヶ月後、別れは突然に訪れた。ご家族の話では旅立たれる数日前、病室から由布岳を望み「今日の由布は美しいのう」と安らかな顔をされたそうだ。

三月、雪が解け由布岳に春がすみが掛かり緩やかな風が朝靄を稜線へと運んでゆく。野に広がる菜の花が、遠くの由布岳と調和し、先生の温かな笑顔と重なった。暫く眺めていると由布岳の山容が富士山に似ているようで友人に問い掛けた。

「そうねえ……。だから『豊後富士』と呼ばれるんじゃないかなぁ」と納得げに答えた。

ふと、太宰治の小説『富嶽(ふがく)百景』の一節、

「富士には月見草がよく似合ふ」が浮かんだ。

調子に乗って「由布には菜の花がよく似合うね」と言うと友人は、フッと笑って頷いた。

今年の八月十一日。新たな国民の祝日として『山の日』が施行された。

「山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する日」との趣旨である。その意味では、ウォーキング中に出会ったご老人の「由布岳に手を合わせ、悩み事が消えることで感謝の念を抱き、生きる勇気を奮い立たせる」という行為は『山の日』の趣旨と重なった。

猛暑日が続く八月十四日。衝撃が走った。母が救急車で運ばれた。早朝、介護施設の看護師さんからの電話で目が覚める。

「声掛けに応答がないので直ぐ来て下さい」緊迫感ある声に私は夫の車に飛び乗った。どんなに急いでも母が運ばれた病院までは一時間はかかる。到着したときは、施設の先生が付き添って下さり、母の診断が下されるまで待った。病名は脳梗塞。その後、私の呼び掛けにも応答せず、意識がはっきりしない状態が暫く続いた。

母は夫に早く先立たれ、長年独り暮らしであった。気丈で何事も完璧にこなす母であったが、八十を過ぎた頃から物忘れが多くなり私は八年間、大分市から通って母の介護を続けて来た。最近、独り暮らしが危うくなり実家近くの介護施設にお願いすることにした。母が病に倒れて、丁度一週間。夢を見た。

（母と二人、山道を歩いている。ふと気が付くと母の姿がない）何か起きたに違いない。嫌な予感がした。焦って朝一番、病院に電話。

「お母さん、昨日から快方に向かってますよ言葉も少しずつ出てきました。――」看護師さんの言葉に耳を疑った。

「えっ！ 本当ですか。それっ。本当のことですか！」私は矢継ぎ早に訊いた。

もう一度、母と話せる。思った途端、一気に涙が零れた。（由布岳が母を守ってくれたのだ……）私は感謝した。病院の先生方、看護にあたって下さった全ての方々に。

次の朝、由布岳に手を合わせた。山容の美しさだけでなく、人々の心を癒し温かく包んでくれる由布岳は、わが大分の誇りである。

やっぱり「由布には菜の花がよく似合う」

【大学等・一般の部】
優 秀 賞

「忘れえぬ景色のあるまち」

杵築市　堀 内 真 由 美

「天神坂からの眺めが好きなんだ」

子どもの頃、三歳年上の兄がそうつぶやいたことがあった。私は内心ドキッとした。実は、私も天神坂から町を見渡すのが好きだったのだ。そんなふうに思っているのは自分だけだと思っていたのに、こんなに身近に同じことを考えている人間がいたことが驚きだった。

天神坂から町を眺めると、白壁と屋根瓦の間から?瓦造りの三本の大きな煙突が伸びているのが見えた。

「あの煙突の根本はどこなんだろう」とは思ったが、それを探す探検に出かけるという発想は全く浮かばなかった。ところが偶然、その中の１本の根本を発見することができた。６年生の時だった。友達のうちの会社の倉庫で遊んでいた時、倉庫の中にその煙突の根本の１本を発見したのだ。「ここだったんだ」と何だか感慨深い感情が心に湧いたのを覚えている。今、天神坂に立っても、三本の煉瓦造りの煙突はもう見えない。

「坂道の城下町」としてアピールを始めた私のふるさと杵築。確かに坂道は、知らず知らずのうちに、子どもの頃の思い出に結び付いている。観光客用のマップには、いろいろな坂の名前が記されている。ただ、ここに生まれ育った私のお薦めは坂道＋α である。坂と言えば低い土地と高い土地をつないでいるわけだが、その坂どうしを横につなぐ道がところどころに存在する。土曜日の午後、習い事に通うため、その道を通っていた。紺屋町の坂、ひとつ屋の坂、富坂を蛇行しながらつなぐ徒歩でしか通れない道、坂どうしをつなぐ道、それが＋α の道。「この道を行ったらどこに着くのかな」と思いながら辿ったら、思いがけない所につながっていて新大陸発見くらいの大発見をした気分になったのを覚えている。子どもの頃の私の二つ目のお気に入りの道である。

TBS 系のテレビ番組「がっちりマンデー !!」に時折出演している東洋経済新報社取締役編集局長の田北浩章氏は、杵築市出身である。小学生の頃、一学年上に在籍していたことを覚えている。彼が新聞に寄稿した文章の中に、ふるさとに寄せる思いが綴られていた。今でも月１回は杵築に住むお母さんに会うため東京から帰郷するという彼は、空港で借りたレンタカーを必ず奈多海岸で停め、市杵島を眺めるのだそうだ。その静かなひとときき、都会の喧噪や仕事での疲れを忘れ「帰ってきた」という至福の感情に浸ることができるのだという。市杵島は奈多海岸の沖合にある岩礁で、赤い鳥居が神々しい印象を与える島である。前出の兄にとっても、市杵島は特別な島だった。兄の世代では、市杵島まで泳げたら一人前の男子中学生という意識があったらしい。田北氏にもその意識があったかどうかはわからないが、市杵島が子ども時代の田北氏にとって杵築を象徴する特別な場所であったことは間違いないであろう。

平成24年の大分銀行のカレンダーに市杵島の写真が採用された。「伝統色で見る大分の風景」の群青色の風景として、朝日に照らされた奈多の海に浮かぶ市杵島の写真が載ったのだ。市杵島の写真は、ほかの風景よりも大きなスペースを割いていただいて中央に大きく載っていた。朝日に輝く群青色の奈多の海と市杵島はとても美しく、カレンダーの中央に大きく据えていただいていることが誇らしかった。平成24年から４年経ってしまったが、このカレンダーは今も大切に保管している。

わがまち杵築の誇り、それはそこで育った人々が目を閉じれば思い出す懐かしい風景を特っていること。

そして、それが同じ世代どうし奇しくも同じ風景であること。ふるさとの共通の風景が心の奥底に自然と宿り、心の拠り所としてずっと存在し続けることである。